

# ハイドン廟にまつわる話



ハイドンの主君として知られている貴族のエスターハイジの城下町のアイゼンシュタットはブルゲンラント州の州都である。

ハイドンはエスターハイジ侯の元で三十年間楽長として勤めた。

アイゼンシュタットにはハイドン廟のあることで有名なベルグ教会（ハイドン教会）がある。ハイドン廟に長らくハイドンの首がなかったのである。

ハイドンはウイーンで亡くなり、ウイーンの墓所に埋葬されたが、後に生前から本人の希望であったベル

さかもと ふ さ

（型絵染版画家、エディター  
イラストレーター）

グ教会に移されたのである。現在首は戻っている。

しかし、私が廟を訪れた時に、棺が大人の棺にしては随分小さいと感じた。戻った首は果たして、お腹の上にあるのか？それとも正常の位置に戻されたのか？真相はわからない。

後日わかったことであるが、脳科学者が犯人だったのだ。ウイーンのお墓から持っていったということである。

偉大な音楽家はお墓に入っても安心して眠ることもできないのですね。

# 義経伝説追跡行

私は、「平泉と小笠原諸島が、世界文化遺産に登録」されたとの報道を知ったとき、一瞬、脳裏をかすめるものを覚えた。平泉の風物のあれこれが、あざやかに蘇ったのだ。

私は、小笠原諸島に関しては、テレビの映像でしか承知していないが、平泉には実際に足をはこび、この眼で親しく中尊寺や毛越寺、無量光院跡などに触れているからだ。平泉のこれらが仏教の浄土思想に基づいて創建された景観であると、世界的に評価されたのが、登録された理由らしい。これが東日本大震災から三ヶ月の六月のことゆ



え、岩手県民、ことにも平泉町民にとつては、暗夜に灯を見るおもいでであったに違いない。

ところで、私が平泉を訪れたのは、もう十余年前にもなろうか。ある旅の雑誌で、悲劇の英雄源義経の伝説、平泉脱出、北行の跡をたどるといふ、はなはだロマンに満ちた企画のためであった。編集者、カメラマン同行の三人だが、旅立ち前から、すでにロマンに酔っている案配であり、交わす会話も、明るく声高である。

藤原氏初代清衡の創建になる中尊寺、二代基衡の毛越寺、三代秀衡の無

量光院跡などを一巡したあと、ただちに、義経の居館跡なる衣川河畔へと向う。

この衣川高館跡を訪ねるには、一金二百円也のチケットが必要だ。が、「源義経公最期の地・義経堂入山券」とある「入山」の二文字に、私たちは思わず苦笑を誘われた。山というよりも、丘というにふさわしい小丘陵だったからである。狭い頂上に義経堂なる小祠と、可愛らしい宝物堂がぼつりと建っているのだが、ここからの眺望は素晴らしい。

私たちは、いちように「おおつ」と

永岡 慶之助

(作家)

嘆声を放ったのである。ぱっと眼前が明るくひらけたといった感があり、東稲連山の山麓、緑の氾濫する平泉盆地の彼方、白鳥の柵の故地あたりから、北上川がゆるやかな曲線をえがいて流れ束まり、これに眼下の山裾で衣川が左手から合流している。

俳人芭蕉も、元禄二年、『奥の細道』の旅の途次、この平泉の高館を訪れて、「義臣すつて此城にこもり、功名一時の叢となる。国破れて山河あり、城春にして草青みたり、と笠打射て、時のうつるまで涙を落し侍りぬ」と記し、夏草や兵どもが夢の跡の一句を詠じている。

文治五年うるう四月、四代当主、泰衡の密命をうけた兵五百余騎が高館を襲った。時に、義経の身近にあったのは、弁慶以下十名あまり、激しい攻防戦のあと、義経は持仏堂に入って自刃した。義経は自刃した筈なのである。ところが、当時から義経生存説があつて、まるで間欠泉のように時代をこえて噴き出すのだ。あの冷徹な学者

新井白石ですら、『読史余論』に、「蝦夷地に義経の家の跡がある」などと述べているほどだ。現に昭和、平成の時代を迎えても、義経が衣川高館を脱出したのは、泰衡の兵に襲われる一年前の、文治四年四月十一日と考証する、篤学な郷土史家もあるほどで、かくいう私たちも、そうした一人というべきかも知れない。

ともあれ、私たちは、義経逃避行の跡を追った。発掘中とかで、青いシートに覆われた柳の御所跡を過ぎ、北上川を越えると東街道となるが、タクシーで迎えること三十キロ。東稲連山の裏側にあたる石清山観福寺に立ち寄る。義経主従が笈したと伝えられ、郎党亀井六郎が残したという笈が伝えられている。

緑濃い山間を縫う白く乾いた街道に、逃避の道をしぐ義経主従の姿が目に見えるようであり、幾つも越えた峠道は、人影もなく森閑と静まり返っているのであつた。

苦渋十日、津軽半島の三厩の漁港に

たどりついた時、恐らく義経主従は果然としたに違いない。あまりにも波濤が荒かつたのだ。ここで一つの伝承が生まれる。義経が嶺頭に坐して、三夜三晩、観世音に大悲を懇求したところ、白髪の老人から三頭の竜馬をさずかり、無事に海峡を越えるをえたというのが、三厩の名の起こりというのであり、鞍馬山義経寺の縁起である。

私たちは、義経主従が逃避北行に苦勞している間、まず第一夜を盛岡市のホテルで、第二夜は青森の浅虫温泉で、ビールや地酒を傾けながら、翌日のプランを練っていたわけだから、義経主従に申し訳ない次第である。

その私も、義経寺の境内から、また半島の突端、竜飛岬にたずずんだ時、青い海峡の彼方の北海道の島影のあまりの近さに、

「義経主従は、たしかに、この海峡を渡った。いや渡つたに違いない！」と思わず唸つたものだ。どうやら私も、旅の終わりにには、義経生存説にイカれてしまったようである。

# 「顔本」事始め



山本千明  
(ECC英会話講師)

外国の方々に初めて出会った時の挨拶が、最近変わってきた。「はじめまして」と「さようなら」の間に、必ずといっていいほどはさまれる言葉―それが「フェイスブックやってる?」だ。

自慢じゃないが「やってます」こちとら昭和生まれの昭和育ち。東京タワーと同級生で、メールが打てたら誉めていただける世代である。ブログもツイッターも「あつしにゃあ関係ございやせん」と通り抜けてきたのだ。その私に向かって二十〜三十代の若者達は「え? やってない? Why?」と攻撃してくる。余計なお世話だ。「パソコンもスマートフォンも持ってない!(どうだまいったか)」と開き直るとさすがに黙るが、まるでネアンデルタール人でも見るかのような表情をさ

れてしまう。

仕事上の報告書も総て手書きで通している。「早くウェブに変更してくださいね」と担当スタッフに言われても「笑って誤魔化す戦法」で切り抜けて来た。私は何も悪くない。紙が発明されて以来、営営と引き継がれた「手書き文化」を継承してただけだ。伝統を守る人間をもっと尊重せよ!とネット社会に盾を突いてここまで来たのだ。

ある日会社から「来年度から全員ウェブ報告書にしてくださいます」と最後通牒が届いた。お仕事は続けたいので、即座に盾を降ろしてそそくさとパソコンを注文。

目の前にまっ白でピカピカのノートパソコン。買ってしまった。ついに。うむ、フェイスブックをやらない理

由が無くなってしまった。おそろおそろ開けて主人を呼ぶ。パソコン歴約三十年のお方である、「フェイスブックしたい。何とかして」とだけ告げて横でふんぞり返る妻。「俺だってそれはやったことないから待って」とあちこちクリックし始める。「はい、パスワード入れて」の声に従って番号を入れていくと、あら不思議、その日のうちにフェイスブックデビューとなった。さすが! 持つべきは一家に一台、理数系の夫である。

まずは知り合いの名前を次々と入力して「お友達になってね」とリクエストを送る。相手が「承認」してくれた時点でめでたくフェイスブック上の「友人」となり、お互いのプライベート写真やメッセージがクリック一つで見せ合える。一日の終わりにチェックするとマメな人達からの近況や最新の写真、お気に入り情報などがダットと並んで届いていた。「昨日見た夕日」「先週行つたレストランのサラダ」「うちのわんこの寝顔」などのブライ

ベート写真から「二日酔いで頭ガンガ

ン」逆立ちできるようになった」等の身近な眩くらきまで、たまにしか会えない人達の「日常」が手に取るように次々と映し出されるのだ。本人が公開していれば「友達の友達の友達」の情報も入ってくるのでクリックしていくうちに「どこのどなたか存じあげない」地球の裏側の一家のリビングルームや夕飯までが覗けてしまう。ネット版「隣の晩ご飯」だ。万人に公開するかどうかは本人の希望次第なので「友人のみ公開」の人のページを覗こうとしても「ちょっと待った！あなたはこの方の友人ですか？」と「門番」が出て来て通せんぼうされる。自分のプロフィールも「名前」「顔写真」「出身地」「職業」など、好きなどころまで公開できるのでハードルの高さは自分で調整できるシステムだ。なるほどなあ。それにしても自己紹介の中には趣味だけに留まらず「恋愛対象〃女性・男性・どちらも可」のどれかを選択したり「××さんと交際中」と高らかに叫ぶ項目

もあって驚いてしまう。

いざ使い始めてみるとかなり便利なシロモノだ。アラジンのようにランブを擦する（マウスをクリックする）と魔人が出て来てお願いを叶えてくれる。ある友人が渡英した。連絡先をききそびれていたが試しに名前で検索するとその「魔人」が飛んで行つてすぐに見つけてくれた。今、その友人とは毎日「情報交換」している。しばらく音信不通だったアメリカの友人の場合。今まで手紙を送っても返事が来る確立、約30%。しかも半年〜一年後が当たり前。フェイスブックで「友達リクエスト」を送ると数分後に返信が来た。筆不精だがネットなら「いつでもOK」という人は多い。メールに慣れ、もはや手書きは「重労働」となったのだろう。我々の世代は皆書ける「筆記体」も今や無用の長物。パソコン世代は「ブロック体」しか使わない。ドキドキしながら丁寧に筆記体で手紙をしたため、エメールで送つて届くまでに一週間、ペンパルからの返事が届くの

にさらに一週間、という時代は遠く遠く霧の彼方に消えてしまった。

フェイスブック。確かに便利だ。思った以上に面白く、出会いのチャンスも無限大に広がってくれる。それでも、あのペンパルから届いた手紙を開ける瞬間の、雲に乗ったようなワクワク感には適あうまい。そう思うとネットの世界にどっぷり浸ひつた若者達は可哀想とも思えてくる。所詮しよせん「ヤスイ、ハヤイ、ウマイ」のファストフードなのだ。食べ過ぎはきつと体に悪い筈。私はやはり昭和人間だ。決してネット社会にハマる事は無い。フェイスブックを嗜たみつつ「手書き」中心に生きていく。この原稿だつて原稿用紙に堂々と「手書き」しているのだ。

マウス操作にも慣れてきた私に、通りすがりの娘が声をかけてくる。「お母さん、またメールチェック？」「一日見てないと十通以上溜たまつてるからね。一応チェックしとかないとね」お母さん、そういうのをハマつてるって言うんだよ」「……?!」

# 野良仕事と野生の動物



宮本 富夫

(高松大学 教授)

今季のコシヒカりは、収穫を少し早めることとした。青米が少し多くなるかもしれないという心配はあったが、天候には勝てない。しばらく雨模様が続くという天気予報を受け入れた。

雨を受けると、穂が水を含み重くなる。根本近くの節間が伸長しやすいからだろうが、コシヒカりは穂が重くなるとよく倒伏する。倒伏すると、コンバインでの刈り取り・脱穀作業がことのほか手間取る。炎天下の作業は暑さとの戦い。熱中症になることは避けたい。そのためには、できるだけ短時間で作業を終えたい。おまけに、倒伏すると砂が最終段階まで混入する可能性が高くなる。これも避けたい。こういうことが一つの理由である。

イノシシの被害をこれ以上大きくしたくない。これが二つ目の理由である。今年はいノシシの訪問を再三受けた。

イノシシは水田の中をジグザグに走りまわる。そのたびに、稲株が踏み倒される。しかも同じルートを通らない。もちろん、乳熟期の稲穂をしつかりと食してくれる。もみ殻を取ることはできないらしく、穂をそのまましつかりと噛み、中身を吸い取り、殻などをそのまま「ベツ」と、吐き出している。そして、気分が向いたら、体を水田の表層にある粘土質の土にこすりつけることまでやる。体についたダニなどを落とすことが目的らしい。地元では、「ヌタ湯をつくる」と、いう。これを行われるとたまったものでない。ある

面積の稲がなぎ倒され、土とこね回され、おまけにイノシシの匂いまでつけてくれる。稲穂の海に、ぼつかりと凹んだ空間が生まれ、まさに土俵ができたという景観となる。収穫する前に、このようになることを避けたかった。

彼らが土俵づくりに至る前に、電気柵という対策を試みた。この対策でもイノシシとある意味での智恵比べがあった。侵入ルートと撤退ルートを電気柵で囲めば大丈夫だろうという目論見は見事に裏切られた。三面を電気柵で囲むと、二日間侵入がなかったのに「やった」と思ったら、三日目に見事に侵入を受けた。残っていた一面からであった。アスファルト舗装の道路側から入った様子であった。イノシシが、予想していた以上に賢いこと、用心深いことなどをしみじみと感じさせられた。イノシシ狩りをやっている近所の方から、「イノシシだつて歩きやすい道を選びますよ」とうかがった。後の祭りである。全面を電気柵で囲むと侵入はなくなった。

二年前にはイノシシにヌタ湯をつくられた。その折の侵入ルートは川の中に自生する丈の高い草の中につくられた。その草を刈り、山側のほとりの雑木を伐倒することで対応した。そのうえで、イノシシの出没時刻と思われる時間帯に見張りに出かけた。運よく、イノシシと川を挟んで対峙。相手が見えたわけではないが、存在するという気配が私の五感にひしひしと感じられた。がさがさと動くたびに音の出所と思しき場所を明るいライトで照射する。すると、ピタッと動きがなくなる。時間をおくと、がさがさ。獣の気配は怒気を含んでいるのかと思われるほど強力であった。ライトを照らすことで動きを見張っていると認識させる作戦。がさがさと、ライト照射の繰り返し。何度か繰り返すうちに、イノシシの気配が感じられなくなった。そして、その時を境に、その年のイノシシの侵入はなくなった。

それにしても不思議である。イノシシの訪問を受けるのは、なぜか我が家

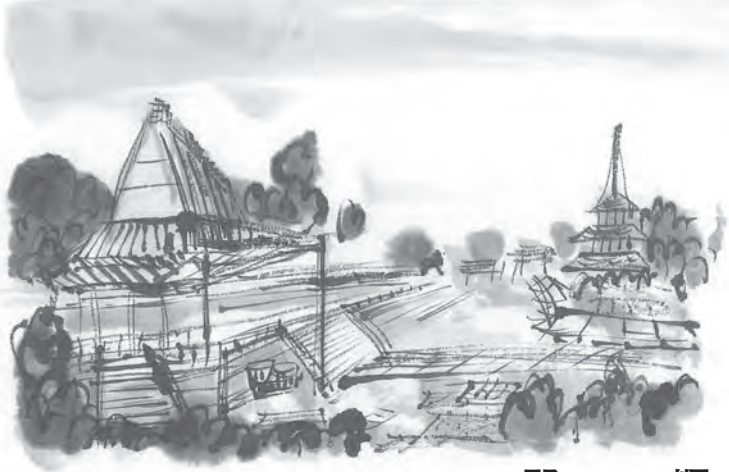
の田が圧倒的に多い。たまには隣の田も訪ねてよと、言いたくなるほど。何が違うのだろうか。堆肥をいれていることもあってか、確かにイノシシの好物といわれるミミズは多い。田植え前の田に水を引くと、ミミズの塊がいたるところに現れる。

殺虫剤と名のつくものは一切使用しないから、虫の種類は豊かである。畔を歩くと、バッタが「バタバタ」と飛ぶ。数の多さに心配になるほど。トンボが群れ飛ぶ。虫を狙うクモの巣も豊か。クモの体型も豊か。早朝、朝日を受けて朝露を光らせるクモの巣を抱く稲穂の海はちよつとした絵の世界。取り入れ時、稲穂の海にコンバインを進めると、虫が飛び立つ。虫たちをめぐって、ツバメが飛び交う。時にはトビまでが参加する。キャタピラの足元を徘徊性のクモが走る。野ネズミが走る。隠れ場所を失った野ネズミは、待っていましたと言わんばかりの、カラスの餌食となる。

稲の生葉を絡めた球状の巣が見つ

る。今年は、三個。大きさはソフトボール大。何年か前から、毎年何個か見かけ、野鳥の巣かなと思っていた。予想に反し、その主は哺乳類のカヤネズミらしい。カヤネズミは、地域によっては絶滅危惧種扱いを受けているとか。日本で一番小さいネズミとされ、頭胴長六〜七センチメートル、体重は七〜八グラムという。地表から約一メートルの高さに直径約十センチメートルの巣、珠巣をつくる。材料は、オギ、スキ、チガヤ、ヨシなどのイネ科植物。バッタやイナゴなど昆虫を餌とするという。昆虫相の豊かな我が家の水田に営巣しやすいと納得したもの、まだご挨拶ができていない。稲の葉を伝い歩く姿、活動の様子を見たい。子育ての様子も見たい。出会える日を楽しみに待ちたい。ひどく害をもたらず野生動物は悩みの種となるが、多くの場合、かれらとの出会いは、野良で作業する者に与えられる楽しみの一つである。

## 小説風・江戸神仏歳時記 (24)

きんりゅうざんせんそうじ  
金竜山浅草寺

## 郡 順 史

浅草の観音様の正式な名稱は、表題のように重々しいものである。

しかし平成の今日の人も、その昔の江戸っ子も、こんな長々しい名前をよばなかった。

「おい、浅草の観音様へ行かねえか」

「いいね、あの浅草の観音様はご利益をいっばいくれるからな」

と言った調子で、ほとんどの人が、浅草の観音様で通じ、正式の金竜山とか浅草寺せんそうじなどとよばなかった。そのほうが互に通じやすかったからである。この点、千葉県の成田山新勝寺と似ている。成田山新勝寺も「成田山へお詣りに行く」と言っても、その下に新勝寺をつけたり、或いは単に新勝寺とだけですます人もいない。成田山で充分に通じあえるからである。

それはともあれ現在浅草の観音様は、日本一の参詣人の多さだと言われている。まあ江戸中期以降、場所も良いし、ご利益も多い、その上に種々の娯楽施設も多く、お詣りのあと一日中たのしめるという事で人気が集まったからであろう。

筆者の経験でも、娯楽の王様はなんと言っても映画、そして軽芝居。それに加えるに食べ物ものの安価さであった。なにしろ他の盛り場へ行くより半



値近いお金で、存分に観たり聞いたりして楽しみ、その上食べ物もお腹一杯食べて足りたのだから、その点でも浅草は魅力的な遊び所、娯しみ所であった。

それよりもまずは浅草寺せんそうじさんのご由緒を記さねば失禮であろう。

江戸名所図会によると、浅草寺は推古天皇の治世の（六二八）三月十八日の夜明け、所の漁師兄弟浜成と竹成の兄弟が隅田川で漁をしていて漁網に仏像をひっかけた。像は小さくはあるが金色に輝きいかにも尊くみえた。

驚いた二人は洗い清めてから村長むらおきの土師はじのまみなか中知の許へ持って行き、

「このような仏像を川から拾いあげました。どうしたらよろしうございませうか」と尋ねた。

中知は手にとって正面、左右から見たがわからない。ただお姿が光り輝き尊くみえたので、二人に言った。

「後ほど高僧に見ていただくとして、ともあれわしが預りお祀り申し上げよう」

中知はそう言って一寸八分の観音像を預り、丁重に堂を造ってお祀りした。

これを伝え聞いた人々が、早くも、

「どうぞお詣りさせて下さい。」

と、一日に何人となくおとずれるようになった。そうこうしているうちに時は流れ、大化元年

（六四八）天台宗の僧侶の勝海上人が、やはり噂を聞き訪れて来て、一眼見て息をのむほど感動し、

「この聖観世音菩薩様をこのようなお詣り方をしてはいけません。この近辺に立派なお堂を建て、祀り人をおき丁重にお祀り申し上げねばなりません」

と集り来たったお参りの人々にも告げ、現在の場所へ小振りながら御堂を建て祀り申し上げたのだった。

これが更にきつかけとなつて、信者の数も参詣人の数も急速にふえていった。

そして更に信者の数もふえ、お堂なども新しく立派になったのは、徳川家康の影響があったといふ。

家康がはじめて江戸へ入府したのは天正十八年八月一日。この日から程なく家康は周囲の町村を見まわった。そして浅草観音堂を見、且つ話を聞いて、

「江戸の守り仏とせよ」

と云つて多額の寄進をすると同時に寺領二百石をたまわった。

もつとも家康の場合、浅草寺への寄進や寺領給与よりも海苔好みのほうが広く知られている。

家康は中食の際、隅田川で採れる海苔を食した。これがすっかり氣に入り、

「このもの美味なり。毎食、食膳に付すように」と近臣に命じた。

だがそれが長くつづかなかつた。

折角浅草海苔という名を付けてもらったが、江城構築のため、隅田川河口一帯を埋めたてすることになり、海苔の産出地も埋めることになったのと、大坂の豊臣との天下争奪の戦さが身近にせまり、家康もあちこち動かねばならなくなつたからである。

ちなみに折角家康に「天下の美味」と褒賞された浅草海苔も、埋めたてられたため取れなくなり、産地を品川沖に移し、名だけは変えず浅草海苔として生産されるようになったという。

しかしそれにしても家康によって浅草という地名が全国的に知られ、浅草観音様の御名も高まつたのはたしかであるう。

## 二

観音様の御名が高まると同時に、直接的なご利益はともあれ伝説伝話が続々と生まれたのも、こ

の観音様の間接的なご利益の一つと言えるのではなからうか。

その伝説伝話のいくつかを記して紹介してみよう。

まずは左甚五郎の作るどころの絵馬の奇談である。

この附近の農家や果実作の人々が、農地の作物、果実が毎晩の如く食い散らされる被害をうけ困りきつていた。

むろん毎晩夜廻りの人が二人一組になって、監視巡回をおこたりなくやっていたがどうしても犯人の姿を見かけない。

「この姿を見せないのは、天狗の仕業ではなからうか」

「天狗が生のままの米や麦、果実をむしゃむしゃ食うか。聞いたことないぞ」

「そう言えばそうだな。とにかく早く正体を見たいものだ」

このように話をあつているある日の早朝、二人は白馬の姿を見た。

そして白馬はいななきもせず、駒音も立てず去つて行く。その去つていった跡を見ると、稲穂がなぎ倒され踏みつけられている。あきらかに食い散らしたあとだ。

二人の農民はお互に頷き合うと、白馬のあとを尾行した。

白馬はひずめの音も立てず、朝霧をのけるようにして観音堂の方へ行く。そして境内に入り、お堂の中へ入ると同時にすっと姿を消した。

二人は急いで近寄ると、そこに白馬を描いた絵馬があり、足は田畑の泥をつけ、口辺に稲穂がついていた。

これだ!!と頷きあった二人は、即座に引きかえして村長に告げた。村長もただちに観音堂へ行き確認すると、堂主に告げた。堂主も確認し、即座に主だった人々を集めていかにすべきかを相談した。

その結果左甚五郎を呼び、その処置をまかせることにした。

甚五郎は絵馬の白馬を眺めながら思案すること一刻(二時間)、やがてノミなども取り出し、白馬の両足に枷をかませた。その上で堂主に、「こうしておけば馬は動けず、農地にも行かぬ筈です。しかしこの馬は外地で食をたしなむ習性が身につけてしまったと思えますので、毎朝七つ寅の刻に(午前四時)餌を与えて下さい」と告げた。

堂主はその約束を守った。その故か白馬は二度と絵馬を抜け出し、農地を荒すことは

しなかったという。

もう一つ。火と煙と。

この話は筆者の亡妻の祖父の体験談であるが、面白いので書かせていただく。

かつて観音堂の向って右手前に、五重の塔と百年公孫樹の大木が立っていた。(現在は五重の塔は左側に新造されて建っているが、公孫樹は枯れてたのか無い)

昭和二十年の米軍の大空襲の際、当然浅草寺も狙われた。その際、祖父は亡妻に、

「観音堂は大丈夫だ。たとえ火がかかっても、公孫樹がまた水を噴いて火がかからないようにしてくれる」と告げたそうである。

二十数年前の関東大震災大火災の際、浅草にも火がまわり、もう少しで観音堂にも火が移りそうになった。その時、前に立っている公孫樹がゆれておびたしい水を噴き出し観音堂にふりそいだ。そのおかげでお堂は火の粉をかぶっても少しも燃えなかった、というのだ。

だがそれは今度は空だのみであったようだ。自然の災害の火は防げても、空襲の火は防げなかつたので、お堂は全燃してしまつた。さいわい寺は、早くから寺宝などを疎開していたので、実害は建

物だけですんだという。

もう一つ、この祖父にはエピソードが。祖父は松竹映画会社から浅草寺周辺の見廻りなどを依頼されて、浅草寺境内を朝夕廻っていたようだが、その中の一つの業務というより、信心深い質のせいだろう、お天気がありさえすれば、毎朝人で賑わう前に境内にある銅像や碑、祠などを丹念にまわってお賽銭をあげていたというのだ。

お賽銭といった所で一錢づつであるが、三十何ヶ所もあり、それを一つ一つ廻りお賽銭をあげるのだから肉体的にも大変だろうし、一錢づつと言っても毎朝の事ゆえこれまた大変だったと思う。

もつとも神社関係の人にきくと、江戸時代から明治大正そして昭和の戦争前にはよく見かけた、と言うから、昔の人は信心深い人が大勢いたのである。

### 三

さてでは浅草観音様は、一体いかなるご利益をわれわれ庶民にお与え下さったのであろうか。

むろん幸運、健康、防災などは言うに及ばないだろうが、江戸時代はきわだつてのご利益は「恋の道」に念願成就が多かったと伝えられている。

もつともこの「恋の道」は、普通一般の結婚や恋愛の念願というより、芸者や遊女といった水商売の女性たちの念願をかなえてくれたようだ。それゆえちよつと氣をつけて注視してみると、現代でもそういう女性の参詣者が多いことに氣がつくのではあるまいか。

それともう一つ、観音堂の前にあるお香台に、お線香の煙がもうもうとして立ちこめているのに氣がつくはずだ。

これは参詣者が、社務所でお線香を求め、火をつけてお香台にあげ、そして自分の苦痛の箇所、たとえば肩、頭、腰などへこの煙をすくってこすりつけるとその個所が楽になる、治る、という信仰からである。

余り医学的な話ではないし、根拠もきわめて薄弱であるが、百年も二百年も続いているのだからどうだろう。「信あらば誠あり」という昔からの言い伝えがあるゆえ、信じて行えば或いは、と思わないでもない。

それでは浅草寺はなぜ東京一といわれるほどの参詣者が多いのだろう。

家内幸福などの一般的なご利益を別にすれば、第一に考えられるのが仁王門の荘厳さではなからうか。地方から出て来てはじめて参詣する人は、

例外なくその前に立つてまらずは驚き、ついで立止つてあきずに眺めやるそうである。

ついで仲店。両側に二十数軒づつ軒をつらねてお土産品や名物品を、ずらつと拝殿前まで売っているのは正に壯観である。他の神社佛閣では祭日以外には見られぬ光景ではなからうか。江戸時代にはこの他に茶店などもあつて客ののどをうるおおしてくれたというのだから、客寄せには抜群であつたらう。現在は外國人の客も多く、お土産品を買い求めて行くという話ゆえ、正に國際的といつてもよいのではないか。

さてここで忘れてならぬのが三社様、いわゆる浅草の守護神を祀つた神社である。

正式には浅草神社というようだが、一般庶民は三社様とよんでいる。正に神佛同祀である。明治維新の際、神佛分離令という法律が出て、どこの神社佛閣でも今まで々境内にあつたのを分離したが、浅草ではそのままでおしてしまつたようだ。ご神体は観音像を川底から発見した漁師の浜成と竹成の兄弟と、村長の土師臣中知のお三方である。

小さなお社であるが、この境内には江戸期の小説家山東京伝の碑や久保田万太郎の句碑があつたりして昔はそれなりに賑わつたあとを偲ばせて

くれる。

だが、それよりも何よりも「浅草三社祭り」の名を高からしめたのは、神輿の担ぎ出しの威勢のよさではなからうか。

江戸時代から続いていたようだが、その威勢はなんといつても戦後ではなからうか。何しろ毎年神輿の上に乗つて声はりあげて威勢をつける若衆たちの、三人に一人は大怪我をするのが普通だと言うのだから、暴れ神輿と呼び、ついには赤坂神社、神田明神社と肩をならべて「江戸三大祭り」と稱したのだから、その盛んなふうは想像出来よう。但し戦後になつて、神輿をかつぐ掛声がいわゆる江戸風の「ワッショイ、ワッショイ」でなく妙なものになつたのが東京生まれの人間には奇妙に聞こえるのだが……。

ともあれ浅草観音様は、江戸、東京の自慢の佛閣であり神社である。更にもう一つ浅草寺の弟分のような待乳山聖天さんを加えねばなるまい。

この神社は浅草寺より南へ五百米ほど行つた小高い丘の上にあり、隅田川が一望に眺められ、江戸時代から勝景の地と知られる所に鎮座なさつておられる。

この神社のご利益は安産ならびに夫婦円満といふ。その故か、毎年一月七日には大根祭りと呼ばれる

て、希望する参詣者は大形の大根煮がふるまわれ、これを食べると夫は妻を、妻は夫がたまらないほど恋しくなると言われている。但し恋の神様ではないゆえ未婚の人にご利益はあるのだろうか。とにかく百聞は一見にしかず、どうぞお詣りして下さい。

— おわり —



(表紙説明)

■オリーブ

植栽百周年を超えて、いよいよ日本の暮らしになじむ「オリーブ」。その美しい実りやオイルは、さらに多彩なオリーブ製品の世界を生む。

平和のシンボルだけに、「和」を守る果実ともなるか。

東洋オリーブ株式会社

所在地／香川県小豆島町池田九八四―五

TEL／〇八七九―七五―〇二六〇

FAX／〇八七九―七五―二二八三

午前八時～午後五時 定休日／日曜日・祝祭日

訂正とお詫び

酒林八十二号に誤植がありました。

左記の通り正誤表を記載させて頂きまますので  
今後とも宜しくお願い申し上げます。

正 誤 表	
謝 り	正
四十四頁、九行目(電話番号) 八四五―九二八二	八四五―九四八二

「酒林」随筆特集 第八十三号 平成二十四年一月一日発行
発行人 西 野 信 也
印刷人 株式会社 太陽社
発行人 西野金陵株式会社

万一乱丁・落丁がありましたら、ご一報下さい。